

## 地域社会をキャンパスに 「闘争心ある若者育成へ」



蛇口 浩敬

(八戸大学長)

八戸大学は、旧八戸南部藩の中核都市八戸市(市内人口二四万人強、広域約五〇万人)にあり、現在のビジネス学部は、明四年四月からは人間健康学部も加わり二学部となる小規模大学です。そこでは規模的にも丁度いいのでしよう、学生達が教員の指導の下で、自由自在に自分達の学問の「実践」を楽しめる雰囲気を持っています。例えば農業高校生と一緒有機野菜を中心街の空き店舗で販売する、市民と一緒に「農援隊」を組成し街道に店舗を構えたりで、いずれもQRコードで生産履歴管理サービスの支援を行いながら活動しています。

また、「北の荒海を観光資源に」で学校法人が先頭に立ち「海の八戸NPO」を設立、そこで学生達が観光政策提言を纏め県から賞金を頂いたこと、更には街中ではB e F M中継、祭りの企画・参加、チャレンジショップへの参加などで学生がこのような形で地域社会をフルに使いきいきと活躍しているのは地方の大学ならではのでしょう。そしてそれは学生にとっても将来貴重な財産になるものと信じています。

八戸大学では上記例のようなフィールドワークを、大学の経営理念である「教育・研究・社会貢献」の重要な一環として捉え、現実にも実践している所に特徴があります。

それがどのような考えに基づき、理念全体の中でどのように位置付けされるのか五つの方向から記述します。

一 建学の精神の一つに「学生達がやりたい事をやらせよ」があります。これは若者が得意とするところで最も熱中し、自己研鑽し、成功する、だから教員たるものその方向に学生達を導き、手助けをしてやりなさいという意味であります。最近の若者は覇気がない、何をやりたいのか判らないとほやく前に、何かを求めている若者達にいろんな可能性を具体的な形で提示してあげるべきではないでしょうか。

八戸大学では、現代という変化が激しい社会・世界情勢下で学生が常に自分に合った多様な方向性を体験しながら模索できるように「商学部」から「ビジネス学部」に名称変更しました。従って普通・商業高校のみならず、工業・農業・水産などの実業高校卒業生も等しく、NPO、コミュニティビジネスの実践あるいはベンチャービジネス支援等まさにやりたいことの中から、自分探しができて真に自信に満ちた社会人に成長していける大志を志向しています。

「やりたいこと」の中にはスポーツも入ります。特待生でもなかった野球選手K君がプロ球団に入り、今年見事新人王に輝きましたがこれも素晴らしいことでした。

二 地域社会の発展なくして日本の将来ありません。若者が地域社会を直視する時、幸か不幸か「課題だらけ」で「自分達でも何とかしなければ」と思う筈です。それが今の若者には大きなチャンスなのだと思います。三つだけ例を挙げてみましょう。

先進工業社会の一地域として、先端技術を駆使したベンチャー起業があまりに少なすぎる。それでは農業も含め先進国らしい「成熟社会」と言えるか、欧米諸国と比較しても程遠い。市民主権・真の分権社会になっている

か、逆にいまだに官主権、中央集権社会ではないか。

このように自分達の身近に多くの矛盾、問題がありますので、彼らに自ら発見し考えさせ、更には国際的な学習もしながら解決へと模索させてあげることが重要です。

そこで学生達が実際に社会に出て（単純なアルバイトではない）実のある「経験、検分」をさせてみることに、それが、彼らの正しい学習意欲を掻き立てる最良の方法であり、従ってフィールドワークこそ最重要とするのが本学の方針となっています。

三 国際化・グローバルゼーションへの実践的な教育・鍛錬は、地方大学にとっても最重要課題の一つであり実際に米国等への短期留学制度、米軍基地等でのインターンシップなどの可能性を提供しており今後も充実させるつもりです。グローバルな人材育成はアジア・中国等と否応なしの一体化への方向性にあつて不可避であり、若い内から異文化とのふれあいによつて日本の若者にも真の危機感、闘争心が生まれると言ふ意味でも必須であります。

なお異文化との交流、そしてそこから生ずる健全な競争・闘争心の涵養が伝統的に少なすぎることが日本へ人の過去の最大の欠落点です。いわば純粹培養のもろさのようなものです。

将来に向けても変わらぬ「日本のカントリーリスク」とさえ指摘されることがあることを真摯に受け止めるべきでしょう。

そして、フィールドワークでの実践で発見した各々の課題についても、少しでも国際比較の訓練などができて、更に地域社会に厚みをもつて情報発信するようになってくれることを期待したいものです。

四 それでは「本学の教職員がこのような実践社会教育、国際化教育に十分の力量があるか」がまさに八戸大学の改革の中核課題です。もちろん大学の存在意義たる真理の追究は重要です。

但しそれは単に「座学」のみにより達成されず、「ゼミ中心主義」＋「フィールドワーク重視主義」の三位一体での研鑽が欠かせません。幸いここ二～三年で教員の皆さんはそれに応えるべく努力をして頂きました。上述の三つの課題に係り海外での研究成果で他県からの出張講演要請にまで応えたり、また広域で実際にフィールドワークのリーダーシップを発揮してくれたり心強いものがあります。もちろん引き続き断続的な努力が必要ですが、これも欧米プラグマティック型教育に負けないという正しい闘争心を持ちつづけることで達成される日も遠からずと信じています。

五 最後に「学校法人」と地域社会との関係ですが、八戸大学のような私大であっても地域の「公器」であり、いわば地域経営の一端の責任を十分に自覚してその発展に貢献すべきものと信じています。

学生達が地域社会の応援を得ながら、一方では批判眼を磨き、或いは破壊的創造の方向性をも示しながら地域社会に溶け込んでいく時、学校法人と地域社会の真の協働関係も確立していくのではないのでしょうか。

八戸大学はこのようにまさに地域社会と一体感を持ち、国際的な視野に立つても決してひけを取らない地域社会構築に向け共闘している存在であると言えます。

最後に若い皆さんに一言PR。八戸という地域でこのように大いに羽ばたき「この地で、或いは郷里にもどりその発展に役立てよう」という若者達を八戸大学は大いに歓迎します。